

E. A. ポオ「Hans Pfaall」, R. A. ロック「The Moon Hoax」と
F. ヴェーラー戯文「酒精発酵の謎とけたり」

中 崎 昌 雄

はじめに

「モールス信号」のモース (Samuel F. B. Morse)⁽¹⁾ は実用的な電信機の発明者として有名であるが、本職はニューヨーク (紐育) 市立大学の美術の教授であり、自身は著名な肖像画家でもあった。彼はまたダゲール (L. J. M. Daguerre) の銀板写真 (ダゲレオタイプ) を始めて米国に紹介したことで知られている。1860年代に紐育で活躍し、万延元年遣米使節の写真を撮ったブレイディー (Brady)⁽²⁾ などの写真家を育てたのも彼である。

モースはダゲールの発明を、その会見記の形にして米国に送った。

マザラン学院における「ダゲレオタイプ」の公開は1839年8月19日であったが、ダゲールはそれ以前から処法の詳細は秘密にしたまま、その作品は人に見せていたらしい。モースが有名な「ジオラマ劇場」に、ダゲールを訪ねて、これを見せて貰って記事にしたのである。この劇場は次の日に全焼してしまった。

モースの手紙は1839年4月20日紐育「*Observer*」紙上で紹介されたが、誰もこれを信用する人がなかったという。

大方の反応は「Ah, another edition of the famed Moon Hoax」だったのである。この有名な「The Moon Hoax」(月偽報道)は4年前の紐育「*Sun*」紙1835年8月21日-31日に載せられたもので、あとで紐育「*Sun*」記者ロック (Richard Adams Locke) の作と判明した。これが偽報道とわかったあとでも、多くの紐育市民はまだ本当だと信じていたと

言われている。

この報道は、その当時南アフリカ喜望峰で実際に南天の観測を続けていた英国の著名な天文学者J. ハーシェル (Sir John Herschel) が「*Edinburgh Journal of Science*」に発表した論文の紹介という形にしてある。仮想の巨大な望遠鏡で見たと称する月世界に関する諸発見の中で、最も人びとを驚かしたのは直立して歩く「コウモリ人間」の生態であろう。

しかし、この「Hoax」で被害を蒙ったのはモースばかりではない。E. A. ポオ (Edgar Allan Poe) も、その被害者の一人である。彼はロック「偽報道」の3週間まえに、リッチモンド市「*Southern Literary Messenger*」誌上に「*Hans Pfaall*」を発表した。これは月への気球旅行物語である。

ポオは続編を書いて、月世界の様子を面白おかしくデッチ上げようとしていたが、この計画を放棄してしまった。ロック「偽報道」への反響があまりに物凄かったからだという。

このロックの巨大望遠鏡を強力な顕微鏡にかえて、これで酵母を観察したと称して戯文「酵母微小動物説」を展開した化学者がいる。それも発表の場は、今度はレッキとしたドイツ化学学術雑誌である。この作者は匿名であったが、本当は尿素の人工合成 (1828年) で知られているF. ヴェーラー (Friedrich Wöhler) が、その当時発表された「酒精発酵微生物説」を揶揄したものであった。ヴェーラーがS. C. H. Windler (Schwindler = ペてん師) の偽名でデュマ (J. B. A. Dumas) の「置換理論」を同じく揶揄した戯文 (1840年) の方は化学史の中で紹介されることが多いが、これより一年前の「発酵戯文」の方は知る人がない。私の知る限りでは、日本で全文が紹介されたことはない⁽²⁹⁾。

1. E. A. ポオ「*Hans Pfaall*」(1835年)⁽³⁾

1835年(天保6年)ポオは26歳である⁽⁴⁾。22歳で陸軍士官学校に入学したものの、すぐ故意に軍務を怠けて放校処分を受けた。そしてボルチモアに住む叔母クレム (Clemm) 夫人のところに身を寄せる。あとで結婚する

1986. 3 「Hans Pfaall」, 「The Moon Hoax」と「酒精発酵の謎とけたり」(中崎) 3 (663)

ことになるヴァージニア (Virginia) の母である。

ここで書いたもので有名なのが「MS Found in a Bottle」(瓶の中の手紙)である。「*Baltimore Saturday Visitor*」誌1833年10月19日に発表されたもので、50ドルの賞金を得た。これでボルチモアでも名が売れて、その当時知られていた作家J. P. ケネディ (J. P. Kennedy) とも知り合いになった。リッチモンド市「*Southerner Literary Messenger*」誌の編集長T. W. ホワイト (T. W. White) の知遇を得たのもこの人の紹介である。

この雑誌に寄稿したポオの書評は評判になり、雑誌の発行部数が急に増えたという。同じ年の8月にリッチモンドに移住したのは、こんなことで編集を任されるはめになったからである。

この頃に「*Messenger*」誌に載せたのが「Hans Pfaall」⁽⁵⁾である。「Hans Pfaall」製作の動機は、あとで書いた「紐育市の文人たち」⁽⁶⁾ (The Literati of New York City) の中のロック評で知ることができる。これは題名のとおり的人物月旦で、紐育に行ってから「*Godey's Lady's Book*」誌(フィラデルフィア)1846年5月-10月号に文人、ジャーナリスト、知名人38人の人物評を寄せたものである。この38人目に「The Moon Hoax」のロックが取り上げられている。

彼とは紐育で知り合ったものらしく、紹介の親しそうな語り口から、気が合った友人になったものと推量できる。「Hans Pfaall」執筆の動機であるが、これはJ. ハーシェル「*Treatise on Astronomy*」を読んだことが引鉄になったという。この本はハーシェルが南アフリカへ行くまえ、英国で1833年に出版されたものである。米国では米国版をHarper社が1834年に発行し、この夏にポオが入手したものと見える。

名著として長く読まれ、1849年(嘉永2年)には増訂版「*Outlines of Astronomy*」となって12版まで版を重ねた。この時代すでにシナ語、アラビア語の翻訳まで出たということから、この本の評判の高かったことがわかる。

ポオ自身も少年時代から、天文学に興味を持っている。こんなことが動

機になって、望遠鏡で見た月世界物語を書こうと計画した。ハーシェルの喜望峰行きの計画が話題になっていたのに刺戟されたのは言うまでもない。これを例の友人ケネディらに相談したところ、それは光学的に不可能だという結論になり、「Hans Pfaall」の気球旅行に変えたという。

そして、この短編は1835年のはじめには完成した。これを載せた「*Messenger*」誌が市場に出て3週間目にロックの「The Moon Hoax」が紐育「*Sun*」紙に掲載され始めたことは前に述べた。

「Hans Pfaall」の原題は「The Unparalleled Adventure of One Hans Pfaall」⁽⁷⁾で、その邦訳「ハンス・プファアルの無類の冒険」(小泉一郎訳)は「ポオ全集」第1巻にある⁽⁸⁾。

「Literati」のロック評の中で、ポオは自分の「Hans Pfaall」は「a tone of banter」(からかい気味)なのに較べて、ロック「The Moon Hoax」は「downright earnest」(トコトン真面目)と言っているように、「Hans Pfaall」の書き出しの部分は「からかい」調でむしろ滑稽話である。しかし主要部の気球旅行のところになると、天文学と機械学の知識を適当に織りまぜて、かなり精緻な「Hoax」に仕上げている。

ただやはり一種のSF冒険譚の味合いが濃く、「瓶の中の手紙」のような戦慄を伴うスリルとサスペンスに乏しい。ポオの作品の中で余り知られていない所以である。

話の発端はロッテルダム市取引所まえの大広場から始まる。ここに大群衆が集まっていて、この上に空から奇妙な形の気球が降りてくる。それが古新聞(それもあとで聞くとロッテルダム版)を貼り合せて作ったもので、おまけに道化帽を逆さまにしたようなフザケた形をしている。

気球に乗っているのは、2フィートほどの小人で両耳がない。これが赤い蠟で封印した手紙を落して空へ消えてしまう。手紙は5年まえに、ロッテルダム市から失踪したHans Pfaallからのものである。そして耳のない小人は月の住人で、ハンスの送った使者だった。

この辺のところは全く滑稽譚の体裁を取っている。手紙の内容は失踪の動機と月旅行の説明である。自分ハンスは40年東ロッテルダム市「漬物小

1986. 3 「Hans Pfaall」, 「The Moon Hoax」と「酒精発酵の謎とけたり」(中崎) 5 (665)

路」(Sauerkraut)で鞆^{フイゴ}なおしを渡世にしていたシガナイ男である。月への脱走を考えたのは、仕事が不景気で3人の借金取りに苦しめられ、これから逃げるためであった。ベルリンのEncke教授(?)の小冊子「Speculative Astronomy」を立ち読みしたことで、気球による脱出計画に傾斜していった。気球はゴム引きの亜麻布で作られ、これには比重が水素の1/37.4の特殊なガスを詰めた。この製作はフランスのNantzに住む従兄弟から教わったものである。

出発したのは4月1日(!)の夜で、鳩の番いと、一匹の猫をのせた(この猫はあとで三匹の仔猫を生むから雌であるとわかる)。準備に時間がかかって出発は4月2日の朝になるが、このとき地面に仕掛けてあった火薬に火をつけて、ついて来ていた3人の債鬼を片付けてしまう。気球は結局4月19日に月に着陸するのであるが、物語は月旅行の可能性に何とか辻褃を合せるのを主題としているから、4月3日までの飛行の初期に全体の半分を費している。

最大の仮定は、地球から月までの空気の存在である。中間では濃度は小さくなって気圧は下がるものの、空間は地球上のものと本質的に変わらない空気で充たされている。ポオはこれを「黄道光」の存在などから立証されるものとする。もちろん、この正しいことはハンスの成功から支持されることとなる。気圧が下がり空気が薄くなるのには「圧縮装置」(「condensing apparatus」小泉訳では「凝縮装置」であるが「圧縮装置」の方が分かりやすい)で切り抜ける。ゴンドラ全体をゴム引き布で覆って気密にして、弁を開けて汚れた空気を外に出す。

次に「圧縮装置」(手動である)を動かして、外の空気を取り入れて1気圧に圧縮してゴンドラに送り込む。

4月7日 北極を真上から見る(Pearyの北極点到達は1909年で、ポオの頃の北極は神秘のベールに包まれていたのである)。

4月8日 地球は「a tint of pale yellow」を呈する。

4月10日-15日 巨大な燃えさかる物体が轟音を立てて気球の傍を通り抜ける。危険極まりない。隕石なのだろうか。

4月17日 ゴンドラの下を見ると眼下に大きな球体が広がって見える。これがなんと月だった。この地点で地球の引力圏が月のそれと入れ換わり、気球は月に向かって落下し始めているのだ。見ると月は無数の噴火口に被われていて、隕石だと思ったのは、これからの噴火物だったのである。

4月19日 外の気圧がゴンドラ内と同じになった。気球が物凄い速度で落下するので、仕舞にはゴンドラを切り離し、気球だけにして、これにしがみついて、やっと着陸した。「目に見える限りの地面は小さな住宅でぎっしり埋まり、私は異様な都市のド真中に頭から墜落していったのです」この町には醜い小人が群がっていて、一言もいわず、突立ったまま助けようとしなかった。

私は月世界に5年来住んでいる。そして月のことはいろいろ知った。月の反対側までも行った。これは地球から見えないところである。

だが私は地球へ帰りたいのだ。帰ったら、こんな情報を天文学者に提供して上げられる。この情報と引きかえに、5年前に債権者を殺した罪を許してほしい。そしたら喜んで帰るであろう。この手紙を持って行くのは月の住人で、私が頼んで行かせたものである。

手紙の宛名は「ロッテルダム市, States' College of Astronomers, 総長 Von Underduk, 副総長 Rubadub」というフザけた名前である。

もともと小説 (fiction) = 「作り物」であって、「絵空事」がその本質の一つといえる。元来が「物語り」なのである。ポオは「瓶の中の手紙」から始まって「物語り」の中に擬科学の要素を加えて、説得力を付与し、もっともらしい語り口で成功した最初の人といえよう。それはもう「Hoax」と呼んでも差支えない。

この傾向を増幅して、本当に新聞紙上を借りて、「偽報道」その物をデッチ上げたのが、後で紹介する1844年紐育「Sun」紙の「The Balloon Hoax」である。

1840年フィラデルフィア市に住んでいるとき、ポオは短編25をまとめた2冊本の「Tales of Grotesque and Arabesque」⁽⁹⁾を作った。

1986. 3 「Hans Pfaall」, 「The Moon Hoax」と「酒精発酵の謎とけたり」(中崎) 7 (667)

「Hans Pfaall」は、この第2巻、3番目に収録されている。この本は1840-1844年の不況が祟ったものか余り売れなかった。ポオは、このとき「Hans Pfaall」のあとに、6ページの「note」をつけた。「Hans Pfaall」の続編を書かなかった言い訳と、ロック「The Moon Hoax」への余り大人気があるとは思えない「科学的」反論である。どちらも「Hoax」に違いないではないかと言いたくなる内容である。詳細は「The Moon Hoax」のところで説明することにして、ここでは最後に私が本業の「化学屋」に立ち返って、小泉訳の「化学」を訂正しておこう。

それはハンスが気球に詰めたガスに関するものである。このガスはフランス Nantz に住む従兄弟が教えてくれたもので、「名前を言うのは控えるが」「*a particular metallic substance, or semi-metal*」と「*a very common acid*」(このところは原本イタリック体である)から発生させたものである。そのガスは「水素の比重の約1/37.4で、無味ではあるが無臭ではなく、純粋のものは緑の焰を上げて燃え、一瞬にして動物を殺す」ものである。このガスの本質についてポオは次のように擬科学をちらつかせる。「it is a constituent of azote, so long considered irreducible」

小泉訳は「そのガスは還元することは不可能と永いあいだ考えられていたアゾートの一成分」となっている。

「アゾート」では何のことかわからない。

岩波「新英和辞典」程度の辞書にでも「アゾート」は「窒素の古名」⁽¹⁰⁾とある。これは窒素に対してA. ラヴォアジエ (Antoine Lavoisier) が命名したものである。ラヴォアジエは彼が開拓した「反フロジストン学説」⁽¹¹⁾をまとめて、これを包括的な化学教科書の形で提示しようとした。それには先ず、混乱している化合物の名前から、錬金術の残滓を払拭しなければならない。

こうして Morveau, Berthollet, Fourcroy の協力を得て、完成したのが「化合物命名法」(Méthode de Nomenclature Chimique) (1787年)である。彼の主著「化学要論」(Traité Élémentaire de Chimie) は1789年に完成した。この年の7月14日にはバスチーユ牢獄襲撃があり、フラン

ス革命の幕が切っておとされた。そして、この革命でラヴォアジエは処刑されるが、「化学要論」は「化学革命」の先駆けとして彼の名を不朽のものとする。

この本には「諸物質の元素と見なすことのできる単体 (Substances simples)」の表があり⁽¹²⁾、この中に「光 (Lumière), 熱 (Calorique), 酸素 (Oxygène), 窒素 (Azote), 水素 (Hydrogène)」が挙げられている。このラヴォアジエの造語 (1776年)「Azote」は「生命がない」(a+zaō) から由来する。この気体の中で動物は死ぬからである。窒素の元素記号「N」の元である「nitrogène」は J. A. Chaptal の命名 (1790年) で、窒素が硝石 (niter) の素であることから来ている⁽¹³⁾。日本語の「窒素」はドイツ語の「Stickstoff」の漢字訳である。

「化学要論」の Robert Kerr 英訳本⁽¹⁴⁾が次の年に刊行されたことは、この本がいかに当時歓迎されたかを物語るものである。事実「近代化学」は、この本から始まったと言っても過言ではない。化学史家 Partington は「現代の化学書の旧版を読む思いがする」⁽¹⁵⁾と評したが、全くそのとおりである。Kerr 訳のとき、まだ現在の英語形の原型「nitrogène」は提唱されていないから、窒素はフランス語「Azote」のままである。

この Kerr 訳は不思議なことに、「単体表」のところの原本の誤りをそのままにして英訳している⁽¹⁶⁾。この「化学要論」原本の重大な誤記について、日本の化学史の本で指摘したものを見ないから、次ぎに注意を促しておこう。それは金属のところ「酸化でき、そして塩基になり得る (salifiables) 金属性の単体」とすべきところを、ラヴォアジエは上段の非金属のところと同じように「酸になり得る (acidifiables)」としているのである。

小泉訳の次の問題は「還元することは不可能」のところである。「irreducible」は「reduce」(還元する)の反対であるから、「還元不可能」でよいと思える。しかし化学では還元といえは酸化の反対で、一般に水素を付加したり、電子を加えることを意味する。しかも「reduce」の原意は「元にもどすこと」「より単純な成分にまでもどすこと」であるから、化学的にはこの場合はむしろ「それ以上に分解不可能と長く考えられていた窒素の

1986. 3 「Hans Pfaall」, 「The Moon Hoax」と「酒精発酵の謎とけたり」(中崎) 9 (669)
一成分であって」と訳するのが穏当で解りやすいと思う。もちろん、こんな気体は実際にはない。

2. R. A. ロック「The Moon Hoax」(1835年)

さきにポオが紐育でロックと知り合いになり、その人物評を「Literati」(1846年) に書いたことを言った。この中のロックの経歴には誤りが多く、当時すでに訂正の投書があった位である。ここでは「Dictionary of American Biography」⁽¹⁷⁾を参考にして、「The Moon Hoax」までのロックの足跡を辿ってみよう。

ロックは英国生れで、誕生日は1800年9月22日であるから、ポオより9年の年長である。ポオはロックを哲学者 John Locke の直系の子孫としているが、実はその叔父 Louis Locke の方の家系だという。

ケンブリッジ大学卒業後、ロンドンで新聞に関係していたが、1832年妻と娘をつれて紐育に来た。紐育では始め「*Courier and Enquirer*」紙の記者をしていた。そして1835年夏に問題の紐育「*Sun*」紙に週12ドルで雇われた。「*Sun*」紙は、その当時チッポケな「penny paper」で、売れ行きも微々たるものであった。

創業者の Benjamin H. Day が経営をしていて、これに気に入られ、入ってすぐ8月21日-31日に「The Moon Hoax」を書いた。

これは J. ハーシェルがその有名な喜望峰の観測所で観察したことを「*Edinburgh Journal of Science*」誌(ほんとうは既に廃刊になっていたのだが)に報告したのを紹介する体裁にしてある。もちろんハーシェルは実在の天文学者で、この当時ほんとうに喜望峰で観測に従事していた。彼の南アフリカ行は世間の注目を集めていたのである。「*Edinburgh Journal of Science*」は廃刊になってはいたものの、かってハーシェルが論文を発表したこともあるレッキとした学術雑誌であった。

この J. ハーシェル(1792-1871年)⁽¹⁸⁾ は天王星の発見(1781年)で有名な William ハーシェル(1738-1822年)の一人子である⁽¹⁹⁾。父のウィリアムが1787年ロンドン郊外 Slough に作った長さ40-フィート反射望遠

鏡（鏡直径 49.5 インチ, 124 cm）は「The Moon Hoax」の 1835 年当時でも世界最大の望遠鏡であった。これはジョンが生まれる 5 年まえには完成していた。

彼は父の奨めで、はじめは牧師志望だったものを途中で法律に変え、さらに化学者ヴォラストン (W. H. Wollaston) に会って自然科学を志すことにした。この方面では正規の教育を受けなかったが、父の Slough の屋敷で化学や光学の研究をした。これが後年、彼を「万能科学者」とする基礎になり、写真の研究 (1839-1840 年) で知られるようになったのもこの時の勉強が役に立っている。

しかし父の血は争えず、24 歳のころから興味が天文学に移り、星雲の研究を始めた。1829 年に結婚し、1832 年母が死んだことが契機となって、早くから志していた南アフリカ行を実行に移すことにした。これは父ウィリアムの「leave no spot of heavens unexamined」という決意を南天に広げ、南天の星、星雲、星団のカタログを完成しようとする大事業である。

政府が無償で軍艦に乗せるというのを断り、一切自費で家族とともに出発したのが 1833 年 11 月 13 日、ケープタウンに辿りついたのは翌年の 1 月 15 日になった⁽⁵⁹⁾。町から 6 マイル離れた Feldhause に家をかまえた。このテーブル山を背景にした観測所の様子は H. C. King 「The History of the Telescope」⁽²⁰⁾ の銅版画に見ることができる。

持っていった反射鏡は三種類で、一番大きかったのは「large 20-foot」（鏡直径 18.8 インチ）と呼ばれる父ウィリアムの作で、ウィリアムは自分が晩年に作った「40-foot」よりこれを愛用したと伝えられている。これを野天に剥き出しにして設備した。南アフリカには 4 年間滞在し、父に劣らず精力的に観測に従事した。帰国したのは 1838 年である。

気温の低い雨期には夜空の状態 (seeing) は良好だが、暑い乾期になると星は「tremble, swell, and waver most formidably」で仕事にならない。その上、湿度が高く青銅製の反射鏡は 3 ヶ月で曇ってしまう。ただ研磨機を持って行ったので、なんとか故障はなかった。ここではまた、1835 年に接近した Halley 彗星を観測し、重星 2000, 星雲, 星団 2000 のカ

1986. 3 「Hans Pfaall」, 「The Moon Hoax」と「酒精発酵の謎とけたり」(中崎) 11 (671)

タログを作った。これらの中で、アルゴ座(現在の竜骨座) η 星の近くにある NGC 3372 星雲⁽²¹⁾のスケッチは特に世に知られている。「Key-hole 星雲」と呼ばれるこの大きな星雲は、多くの星を含み、その複雑な「endless details」⁽²²⁾を写生するのは絶望的に困難だと、さすがのハーシェルも嘆いた。写真のなかった時代だから眼視で観測し、手で写しとる以外に手段がなかったのである。これには数ヵ月を要した。

南アフリカ喜望峰の孤絶した環境での、困難を極めた観測事業は、当然ヨーロッパの人びとのロマンチックな関心を誘う。

これに、うまく便乗したのがロックの「The Moon Hoax」であった。

さて「The Moon Hoax」の内容であるが、私はまだこれが掲載された紐育「Sun」紙の写しを手に入れていない。とにかく、この「Hoax」は空前の大成功で、あとで小冊子にまとめたものが、米国はもとよりヨーロッパ主要都市で翻訳出版されたという。

現にポオが「Hans Pfaall」の「ノート」に反論(1840年)を書いたとき、その箇所をこの小冊子の何ページ目と指示している位である⁽²³⁾。この「ノート」, 「Literati」ロック評(この中にも「The Moon Hoax」に対する反論があるが、その中身は全くといってよいほど「ノート」の引き写しである), さらに M. Gardner 「Fads and Fallacies」⁽²⁴⁾, C. D. MacDougall 「Hoaxes」⁽²⁵⁾の中の「The Moon Hoax」関連の部分を継ぎ合わせて次に紹介しよう。

とくに MacDougall 「Hoaxes」では「第17章 Journalistic Hoaxing」で、これが最初のしかも典型的な「新聞偽報道」の例として取り上げられている。

話はすでに説明しておいたように、J. ハーシェルが「*Edinburgh Journal of Science*」に報告した内容を紹介する体裁を取っている。

使用した望遠鏡は Rosse 卿の「The Leviathan of Parsonstown」⁽²⁶⁾と呼ばれた口径 180 cm 反射望遠鏡が、玩具(plaything)に見えるほどのものであった。倍率は 42,000 倍だという。これで月表面を観察したことにするのである。月には海, 河, 湖があり、その周りにはいろんなものがある。

この偽報道の中で紐育ッ子をもっとも驚かしたのは4回目、8月28日の記事で、ここで始めて「コウモリ人間」(man-bat)が登場する。

「コウモリ人間」

数えて見ると、この生物は3組に別かれていて、12人、9人、15人のグループになっていた。そして直立したまま、小さな林の方に歩み去った。翼が仕舞ってあるとき、その歩き方は直立で威厳があり全くわれわれ人類のようである(中略)。はじめの組の半分は視野から消えて行ったが、残りの組ははっきり見え、ゆっくり観察することができた。

平均して4フィートの高さがあり、顔以外は短い艶のある銅色の毛で被われている。翼は毛のない薄い膜で、肩の上からふくらはぎのところまでピッタリと体に着いている。

黄色がかった肌色はどちらかというところオランウータンに近く、もしあの長い翼さえなかったら、例のロンドン在郷軍人のパレードに似てなくもないというのが、Drummond 太尉の意見であった。

頭髪は体毛より濃く、カールしているが、ふんわりとした羊毛形ではなく、額のところで奇妙な風に三日月形に二つに分けてある。彼らの足は歩くに連れて交互に挙げるので見えるが、ちらっと見たところでは、踵の所でとんがっているようである(中略)。

翼はと言うと、その構造は蝙蝠のそれに近く、大きく広げられるようである。この蝙蝠のような半透明の膜は、背中の外皮で背部にまとめられ、そこから放射線状に出る筋に沿って広げることができる。もっとも驚くべきことは、その膜の形で、それは下へ行くほど幅狭くなるものの、肩から足まで、ずっと体にくっついていてと云う事実である。この翼は完全に思うように動かせると見える。水中に浸かっているところを見ると、それを全開にし、水を振り落すには家鴨のようにそれを振る。そしてすぐ畳んだ形に仕舞い込む(中略)。

この生物(彼らには雌雄がある)の挙動を仔細に観察した結果、判明した事実の数かずは、あまりにも驚くべきものなので、これらはむしろハー

1986. 3 「Hans Pfaall」, 「The Moon Hoax」と「酒精発酵の謎とけたり」(中崎) 13 (673)
シェル博士自身の口から直接に公表していただく方が正当であると信ずるものである(中略)。確かにこの生物は無垢なるがゆえに、楽しく暮している。ただ彼らの娯楽の中には、われわれ地球人の道徳基準にそぐわないものがあるのも事実ではあるが。

この「Hoax」は大成功で「penny paper」の紐育「Sun」紙の発行部数は一ぺんに19,360部に跳ね上がった。当時としては驚異的な数である。あおりを喰った競争紙の中には、ありもしない「*Edinburgh Journal of Science*」を独自に入手したと称して、ロックの記事を再録(lift)したりするものが現われる仕末になった。エール大学の学者は調査委員を紐育に送り、この「*Edinburgh Journal of Science*」の実物を見せてくれと迫る。

紐育「Sun」社では、それは印刷局にある、いや編集局にもどしたと学者を盥回しにしたので、委員は失望してNew Heavenに帰ったという。その内に筆者は紐育在のフランス天文学者J. N. Nicolletという説も流れ始めた。とうとう「*Journal of Commerce*」誌までが、これを出版させてくれという騒ぎになって、Day社長はロックを正面に出さざるを得なくなった。これが9月16日のことである。

ロックが「コウモリ人間」は無垢(innocent)の故に非道徳な行ないをしているように仄めかしたので、ある教会ではハーシェルに手紙を書いて、伝道団を送って改宗させられないものかと訴えることまであったという。

とにかく紐育っ子の半数までが、真相が暴露されてからでも信じていたというから「大Hoax」であったのには違いはない。

辛うじてこれに匹敵するのは、1938年10月30日万聖節の夜のOrson Wells「ラジオ偽報道」⁽²⁷⁾であろう。これはH. G. Wells「War of the Worlds」(1898年)の火星襲来を「ニュース放送」の体裁でラジオで流したもので、全米6百万人の人が聴き、百万人は信じて恐怖に駆られたという。とくに南部で騒ぎがひどかった。

「The Moon Hoax」に対するポオの反論「ノート」(1840年)につい

ては少し触れておいた。自分の「Hans Pfaall」のインチキは棚上げにしておいて、この反論は大真面目である。その例を二三挙げてみよう。

倍率42,000倍であると、月の表面を6マイル(10 km)の距離から眺めることになる。ポオは計算する。それではハーシェルの報告する *Papaver rhoe* (ケシ) の形や色、まして小鳥の眼の色など見えるはずがない。

こんな反論が続くのであるが、中には苦笑させられ成程と思わせられるものがある。

月を眺めるのは空中から地上を見るのと同じで、「コウモリ人間」のまず見えるところは頭为天辺のはずである。それを始めに記述するはずなのに、その驚きを書かずに顔とか全身の説明から始めているのは可笑しいと言うのである。

この反論は1840年のもので、このときロックはもう紐育「Sun」社を辞め、共同で「New Era」紙を創刊している。ここで、また奥の手の「Hoax」で、二匹目の泥鰌を柳の下に捕えようとした。

これは「The Lost Manuscript of Mungo Park」という記事である。Park (1771-1806年) はスコットランドの探険家¹²⁸⁾で、1805年ナイジェリア河の源流を求めて奥地に入り、11月17日の手紙を最後に消息を絶ってしまった。1810年には、その事情を調査するための探険隊まで組織されたが、その失踪の謎は解けなかった。このParkの日記を発見したという偽報道なのである。「The Moon Hoax」の次の年では誰も信用しない。

2匹目の泥鰌はいなかったのである。

このあとロックは「Brooklyn Daily Eagle」紙などの編集をしていたが、1840年にはポオ「The Balloon Hoax」を紐育「Sun」紙に紹介している。最後は紐育港の税関吏をしたという。死んだのは1871年2月16日で、ポオの死(1849年、40歳、嘉永2年)から22年も経っていた。

ポオが紐育で窮乏の中で書いた人物評「Literati」(1846年)によると、ロックの外貌にはアバタが目立つ。そのため両眼はゆがんでいる。だが、それは静かに輝き、賢そうである。とくに額が美しい。また性格は真に想像力のある人にふさわしく、冷静さと興奮しやすさの矛盾した混合物で

あったという。

全体からは天才の高貴性といったものを感じるとも言っている。またその筆跡の複写もあり、そこでは「unquestionable genius」の一人で文芸の価値をその効果から判断するのなら、彼の「Hoax」こそ、もっとも価値あるものだと評している。その証拠に1846年ころ紐育「Sun」紙の発行部数は5万部になっていたそうである。

いずれにしても、ポオ「Hans Pfaall」の続編は書かれず、未完で終わった。哀れなハンスは月に行ったままである。「Literati」ロック評⁽⁶⁾でポオは次のように書いている。「He remains where I left him, and is still, I believe, 'the man in the moon」

3. F. ヴェーラー「酒精発酵の謎とけたり」(1839年)

F. ヴェーラーは1800年7月31日生れであるから、ロックと同じ歳である。尿素の人工合成に成功したのは28歳の時で、このときはベルリン市立工業学校の教師をしていた。ストックホルムのJ. ベルセリウス(Jacob Berzelius)のところで1年足らずの留学から4年経っている。彼は尿素合成の前年、1827年にはアルミニウムの単離に成功し、その元素性をほぼ確立して、すでに有名になっていた⁽³⁰⁾。化学史の中には⁽³¹⁾、尿素の合成はヴェーラーが生命の謎をとくため、有機化合物を合成しようと研究して発見したものと説くものがある。しかし、この「化学伝説」は誤りで本当は全くの偶然なのである。

彼はすでに、ストックホルム滞在中⁽³²⁾から、ジシアン(C₂N₂)の加水分解の研究をしていて、その生成物の中にいわば偶然に尿素の生成を認めたのである。別の「化学伝説」⁽³³⁾は、この発見で「生命力」(Lebenskraft)説が一挙に覆されたとする⁽³⁴⁾。有機化合物は「生命力」の作用でのみ生体の中で生成し、これが無機化合物と有機化合物とを截然と区別するという学説がこれである。「生命力」説は尿素合成のあとも永く信じられた。

ヴェーラー自身は人間や犬の腎臓の助けを借りずに尿素が作れたと(künstliche Bildung)報告していても、本質的に実験家であった彼は、

自分の業績に対して、それほど大きな理論的価値を与えてはいない。

1828年2月22日には手紙を書いて、尿素合成をベルセリウスに報じている。

この末尾で彼は次のように言う⁽³⁵⁾。「しかしシアン酸（そしてアンモニアも）を作るのには、最初に有機物がなければならないのは注目すべきことです。そこで自然哲学者はこう言うでしょう。獣炭、シアン化合物の中から有機的なものはまだ消滅していない。だから有機物はつねに有機物からのみ再生されるのだと」

ヴェーラーの使用したシアン酸もアンモニアも、その当時は馬の爪とか獣血、獣炭から作っていたのである。

このころ、彼はリービヒ（Justus Liebig）と親しくなった。リービヒはギーセン大学で有名な実験室を作り活躍している。1831年リービヒの考案した有機化合物分析装置は、簡便でしかも正確な分析値を与える画期的なものであった。これがギーセン大学における有機化合物研究に拍車をかけていた。

この二人の共同研究⁽³⁶⁾は「安息香酸の根（ラジカル）⁽³⁷⁾について」（1832年）に結実した。これは苦扁桃の種子から採れる油の成分ベンズアルデヒド（梅酒の香り）の研究であって、現在の式で書けば（ C_6H_5CO ）という原子団が一つの塊りとなって行動することを確めたものである。

（ C_6H_5CO ）（H）ならベンズアルデヒドで、（ C_6H_5CO ）（OH）になると馬の尿の中に見出される安息香酸となる。

この発見はベルセリウスの唱える電気的二元論の枠内におさまり、有機化合物も無機化合物と同じように、この統一理論で説明できるという彼の説を支持した。

しかし有機物はそう単純ではない。この頃になって、電気的二元論では説明に苦しむような実験結果が報告され始めた。それはリービヒがソルボンヌ大学のゲイ・リュサック（J. L. Gay-Lussac）の研究室で仕事をしていたときに（1822-1824年）一緒だった、パリのデュマ（J. B. A. Dumas）の仕事である。

デュマは「置換理論」(1834年)を言い出し始めた⁽³⁸⁾。たとえば酢酸は現在の式で書けば($C_2H_4O_2$)であるが、これに塩素ガスを作用させると、水素原子が塩素原子に入れ換わりクロル酢酸($C_2H_3ClO_2$)ができる。これが元の酢酸と性質がほとんど変わらないというのである。電氣的二元論によると、水素原子は典型的な電氣陽性であるのに、塩素原子の方は典型的な電氣陰性である。この陰陽正反対の原子が有機化合物分子の中で互換性があるというのでは、電氣的引力に基礎をおく二元論は崩壊してしまう。

1839年になるとデュマは「置換理論」を発展させて、「型(タイプ)理論」⁽³⁹⁾を提唱した。これはローラン(A. Laurent)の「核理論」を修飾したもので、次第に現在の「構造」の考えに近づいている。

それは次のように主張する。

「有機化合物の性質は、その中の原子の配列と数で決まり、その原子自身の化学的性質に依存することが少ない」

このときデュマは有機化合物の中では、炭素原子まで他の原子で置き換えても性質に大きな変化はないと勇み足を踏んでしまった。この小股をすくったのが化学史上に有名なヴェーラーの「S. C. H. Windler」戯文(1840年)である。これは皮肉なことに、デュマのいるパリからリービヒに送られた手紙の形にしてあり、フランス語⁽⁵⁵⁾で書かれている。その要旨は次のようである⁽⁴⁰⁾。

「酢酸マンガン($MnO \cdot C_4H_6O_3$)のすべての原子を塩素原子に変えると($Cl_2Cl_2 \cdot Cl_8Cl_6Cl_6$)になったが、これは元の酢酸マンガンの性質をそのまま残している」。これにつけた脚注はリービヒの手になるので、「ロンドンでは塩素を紡いだ布まで売っている」⁽⁵⁷⁾というのである。

こんな戯文を、しかもデュマの優れた長文の論文のすぐ後に掲載するのだから、この頃の論争の激しさが実感される。おまけに、この時デュマはロンドンのグレイアム(T. Graham)と一緒にこの雑誌の編集協力者なのである。

この雑誌はリービヒとヴェーラーが共同で編集している「Annalen der Chemie und Pharmacie」である。リービヒは1831年「Geiger 薬学雑誌」

を引き継ぎ、1832年にこれを「Annalen der Pharmacie」と改名した。ヴェーラーが共同編集者となって参加したのが1838年で、誌名にヴェーラーの提案に従って「Chemie」を加えて、この戯文の1840年から「Annalen der Chemie und Pharmacie」にしたのである。

この提案の手紙は1838年10月18日付のもので、この手紙に対するリービヒからゲッチンゲン大学のヴェーラーへの返書は1838年11月18日付である⁽⁴¹⁾。この中に「発酵に関する君の戯文は印刷に出した。私も少し書き加えた」とある。これが、これから紹介しようとする戯文「酒精発酵の謎とけたり」(1839年)である。「S. C. H. Windler 戯文」の1年前であるから、この化学史上有名な置換理論を揶揄する戯文に対して、発酵戯文が呼び水の役目を果たしていることは間違いない。二人はこのころ、また苦扁桃油の共同研究をしていた。苦扁桃種子の中からアミグダリンという物質がとれる。同じく種子の中にあるタンパク質様物質(現在の酵素)エムルシンをこれに作用させると、エムルシンはアミグダリンを加水分解して、ベンズアルデヒド、青酸、ブドウ糖にする。

このエムルシンは微量でも有効であり、この作用は酵母による糖の分解すなわち発酵に近縁なものと二人は考えた。この考えに従えば生物は酒精発酵に直接には関与していないことになる。

ところが、ちょうど同じころ酒精発酵微生物説⁽⁴²⁾が主としてフランスで唱えられ始めた。フランスの物理学者カニヤール・ラトゥール(Cagniard de La Tour)の説である。

これによると、ビール醸造のとき沈殿物として見られる灰白色の「ビール粕」は単なる物質ではなくて、出芽によって増殖する植物性生物である。発酵はこの生物の生活に関係する新陳代謝の結果であるという。この説には植物学者で生物細胞説のシュワン(Theodor Schwann)も賛成した。

これらを追試して、まとめた結果をP. J. F. Turpinがフランス学士院紀要(1838年)に出し、この概要をリービヒがドイツ語にして自分の「Annalen」に掲載した。

この概要は93ページから始まり100ページの中央で終わる。この後す

1986. 3 「Hans Pfaall」, 「The Moon Hoax」と「酒精発酵の謎とけたり」(中崎) 19 (679)
ぐ続けて戯文「酒精発酵の謎とけたり」(速報) (Das enträthselte Geheimniss der geistigen Gährung)⁽⁴³⁾ を掲載するのであるから、リービヒもヴェーラーも相当な「ワル」である。

化学は自然科学の中で遅れている。その上に有機化学はとくに生命現象と関係が深く、どうしても「生命力」のような自然哲学がもぐり込みやすい。これに二人は機械論で対抗しようとする。現に前に引用した1838年10月18日の手紙でリービヒは宣言している。「われわれは、さらに砂糖を作り、キニンを作り、尿酸を作ることになるだろう」

そのうえ二人はエムルシン酵素の強力な作用を知っている。これは微生物でもなければ増殖もしない。

次に戯文の全文を紹介しよう。この中で酵母の大きさとか糸状体の様子などはTurpinの論文そのままである。

「酒精発酵の謎とけたり」

ここにアルコール発酵に関する新説を開陳しようと思う。私はこれまで全く解決されていなかったこの反応を追求し、これをもっとも簡明に解釈し得たと信ずるものである。

この発見は同時にまた、この驚くべき変化をおこすに当たって自然がいかに単純な手段を使っているかと言うことをも示すものである。これが可能になったのは強力な顕微鏡の御陰である。この顕微鏡は著名なEhrenbergの指導に従って、Pietorius技師の卓越した技術により完成した。

水に分散させた酵母をこの顕微鏡で見ると、非常に小さな球体と、同時に極く細かな糸状体が観察される。

球体は直径1/800リーニエ(訳注:リーニエは1/100フートで1/800リーニエは 3.81×10^{-3} mmにあたる)であって、糸状体は明らかにタンパク質である。

球体を砂糖水の中に入れると、小動物の卵である球体は膨脹し分裂して、これから小動物が発生する。そして目まぐるしいばかりの速さで、他に類のないような仕方で増殖して行く。この小動物は現在知られている

600種とは別のものであり、外形は Beindorf 型蒸留器（ただし冷却器をはずしたもの）に似ている。上蓋から出ている側管はある種の昆虫の吸吻のようで、その内側は細かい長さ $1/2000$ リーニエの剛毛でおおわれている。

歯や眼は見当らないが、胃、腸管、肛門（淡紅色の点に見える）、尿排泄器は明瞭に識別できる。卵から孵るやいなや、この小動物は水溶液から砂糖を喰えこんで、これを疑いもなく胃に送る。そして、ここですぐ消化する。この消化作用は、それに続く排泄物の排出からも明らかである。

一口に言えば、この微小動物は砂糖を喰って、腸管からはアルコールを、尿管からは炭酸を排泄するのである。

膀胱は膨らんだとき、シャンパン瓶の形をとり、空のときはコブ状となる。少し経験をつめば、さらにこの内部にガス袋があって、これが10倍にまで膨れるものであることが観察できるだろう。

この外部をリング状に取りまく筋肉があり、微小動物はこれを随意に動かしてラセン運動をさせ、排泄行為をするのである。この時、私は金属導体の中をガルバニ電気が通るときのような現象が起きているものと確信している。高名な物理学者の意見を待つまでもなく、明らかにここには磁気が発生している。これは自然の法則の命ずるところに従って、直線よりむしろラセンを描くように働くだろう。

このことを Döbereiner, Schweigger の言うように、発酵には電気、磁気とともに関与しているという説への論拠に挙げたいと思う。ただ、この仮説をこれ以上に追求するのは止めることにする。

さて、この小動物はつねに肛門からある種の軽い液体を吹き上げており、その巨大な生殖器からごく短い間隔をおいて炭酸の気流を噴出しているのが観察される。

培養液を沸騰させると、発酵は止まる。小動物が高温で死ぬからである。亜硫酸を加えるとか、アルコールを余分に加えるとか、鉍酸や酢酸を加えるとかすると、同じように死んで発酵は止まる。

水の量が少ないとき、逆にいうと砂糖の量が多いとき、もちろん発酵は

1986. 3 「Hans Pfaall」, 「The Moon Hoax」と「酒精発酵の謎とけたり」(中崎) 21 (681)

進まない。これは何故かという、小動物は濃い液体の中ではその位置を変えるのが出来ないのか、または変えるのに非常に大きな努力を必要とするからである。

この結果、運動不足となり不消化から死に至るのである。

つぎに、この小動物の消化力がどんなものかを知るために、体重との比較を試みよう。Thenardの結果を元にするると乾燥ビール酵母3部は砂糖200部をアルコールと炭酸に変えることができる。

すると、この小動物が18時間に出す排泄物は、その体重の約66倍に達する。

注目すべきは、カラシ油のこの小動物におよぼす作用である。発酵液の中に少量のカラシ粒を入れると、すぐその活動は弱まり、死んだようになる。しかし数時間たつと、おそらく通気のために回復し、発酵は再び活発となる。この作用はアニス油に似ているところがある。ノミはアニス油の臭気で気を失い、それは油が蒸発してしまうまで続く。

さらに私はソラニン⁽⁵⁶⁾がこの小動物に有害作用を発揮することを発見した。盛んに発酵している砂糖液の中にソラニンを加えると、この小動物は縦に縮んで、この吸吻からある液体を噴出するのが観察された。これは疑いもなく、ジャガ芋の中にその存在が証明されているフーゼル油である。穀物アルコール、ブランデーの中にある、このフーゼル油はこの微小動物の表皮から発汗のようにして排泄されるようである。

重大であるが現在のところ解明されていない問題は、どうしてこうもこの小動物が類もないほどに砂糖を好むのか、それをどのようにして同化するのかという点である。この後の問題は明らかではなかろうか。すなわち、すでに説明したタンパク質様の細い糸状体が、この小動物の窒素源となり、これが砂糖と一緒にとり込まれて同化されるのである。

つぎに注目すべきは、この小動物の化学組成である。私は、その0.437 g ($50,000 \times 10^6$ 個体に相当する) をとり、常法に従って酸化銅を加えて分析してみた。この結果はタンパク質 (Muiderの分析結果による)、エーテル、炭酸からなると考えると都合のよい割合に4元素(炭素、水素、酸素、

窒素)を含んでいるという分析値を与えた。

こうして、その消化過程の全貌のみならず、そもそもなぜ酵母が発酵を起すかという、今まで不明であった部分を、明らかにすることができたわけである。

砂糖が欠乏すると、この小動物はすぐ共喰いを始める。これは適当な操作で起させることが可能である。そして消化のあとに卵だけが残る。卵は腸管の中をそのまま通過できるからである。こうして発酵可能な酵母、言い換えればこの小動物の種子が回収される。そして最後の死骸は結局、アンモニアと少量の酢酸にまで分解される。当然のことながら、この残った発酵の種子は最初に用いた量より少しばかり減っている。

詳細な数値、およびこの小動物の形態の図解などは、より詳しい続報に譲ることにする。

この戯文「酒精発酵の謎とけたり」に対するロック「The Moon Hoax」(1835年)の影響を証明することは、今のところ出来ている訳ではない。

しかし両者とも強力な仮想の光学機器を利用した「Hoax」である。そして「The Moon Hoax」はヨーロッパ主要都市でよく読まれたというから、ヴェーラーがその騒動を知らないはずがない。「酒精発酵の謎とけたり」と同じ年の、モースの「銀板写真」報道が「The Moon Hoax」の御陰で信じてもらえなかったことは冒頭で述べた。4年前のことでも、これだけの影響が残っていたのである。

しかもこの時分には、まだ微生物の自然発生が一部で信じられ、顕微鏡下でそれを証明したと称する人までいた。イギリスのA. クロス(Andrew Crosse)⁽⁴⁴⁾は水の中に沈めた石に電流を通じ、顕微鏡で観察したところ26日にして微小な昆虫が発生するのを発見した。1836年のことである。これはダニの一種で28日には足を動かし、100匹位にまで増えた。液から出ると、光を避けて暗処に隠れるとまで報告している。これは「Hoax」でも何でも無い。大真面目な実験なのである。

バストゥールとプーシェ(F. A. Pouchet)の自然発生説⁽⁴⁵⁾論争(1861

1986. 3 「Hans Pfaall」, 「The Moon Hoax」と「酒精発酵の謎とけたり」(中崎) 23 (683) 年) は、これからまだ20年も先のことである。

戯文「酒精発酵の謎とけたり」のあと、リービヒをめぐる発酵論争は長く尾を引き、1857年頃から化学者パストゥールが登場して来て激しさを加える。両方とも論争好きの感情家だから仕方がない。パストゥールは酵母が介在しないと信じられていた乳酸発酵液の中から、酵母よりずっと小さな乳酸菌を発見し、この増殖と発酵との相関関係を追求した。

リービヒの方は相変らず化学的である。酵母は非常に変性しやすい物質で、これが分解する時その運動が糖に伝わり、その解体すなわち発酵を促すという説を固守する。

両者の論争はパストゥールに軍配が上がったかに見えた。しかし1896年になるとブッフナー(E. Buchner)が酵母を圧搾して生命のないチマーゼ(zymase)を得、これだけでアルコール発酵のおこることを立証した(1907年ノーベル化学賞)。これはパストゥールの死の1年あとのことであり、リービヒが死んでから23年も経っていた。

4. E. A. ポオ「The Balloon Hoax」(1844年)

「Literati」は1846年ポオが紐育に来てから書いたものである。紐育に出て来るまえには、フィラデルフィアに6年いた。ここにいた最後の年には「黄金虫」(The Gold Bug), 「黒猫」(The Black Cat) など、われわれに馴染みの深い短編を完成している。「黄金虫」では100ドルの賞金を獲得した。

紐育に到着したのは4月で、この時その登場を彼らしく大仕掛な仕掛火花で宣伝し、大向うをあっと思わせよう企んだ。これが「The Balloon Hoax」⁽⁴⁶⁾である。これは1844年4月13日(土曜日)紐育「Sun」紙に掲載された。例のロックに頼んだものという。「The Moon Hoax」から9年経っているとはいえ、登場するのが悪名高い同じ紐育「Sun」紙上である。

おそらくポオは「Hans Pfaall」の延長で軽い「banter」気分だったのだろう。紐育「Sun」社で伝説になっている話がある⁽⁴⁷⁾。明らかに酔っぱらったポオが社の販売所の前にやって来て、号外を求めようとしている群衆に

向って、自分が書いた偽報道だから買わないように叫んだと言うのである。

内容は他愛もないもので、8人の塔乗員を乗せたプロペラ気球が4月6日午後11時英国ウェールズを出発、4月9日午前2時南カロライナ州サリバン島に着いた。この75時間大西洋横断飛行を日記の形で「スクープ」したと言うのである。

この塔乗員の中にポオは数名の实在の人物を加えている。主役はT. M. メーソン (Thomas Monck Mason) で、この人は8年まえに気球でドーバー海峡を越えた。C. グリーン (Charles Green) と気球 Great Nassau 号に乗り、ロンドンとドイツ Weilburg 間を飛行したのである。1836年11月7日から8日にかけての飛行であった。この飛行が単行本の形で発表され、ポオはこれを参考にし、おまけにメーソンを塔乗員に仕立てて「Hoax」をデッチ上げたのである。

本当らしくするために、バネ仕掛で動くスクリュウ推進装置（動力源は書いていない）とか、水素ガスの代りに石炭ガス (!) を用いたとかを付け加えている。これは「*Burton's Magazine*」誌から仕入れた知識らしく、水素は漏れやすくて6週間しかもたない、ところが石炭ガスなら6ヵ月は平気だとか知ったかぶりを振りまわしている。

飛行の目標は始め北ウェールズから出発して、パリを目指したのだが、途中でバネ仕掛とスクリュウ推進装置との間の連結機がはずれてしまう。しかし、ちょうど都合よく風が東風だったので、思い切って大西洋横断にしたと言うのである。着いたところはチャールストン港外、Sullivan 島、Moultrie 要塞であった。ここはポオが士官学校に入るまえ、陸軍にいて1827-1828年約1年間勤務したところである。「黄金虫」の舞台はこのサリバン島にしてある。南北戦争は、この砲台が1861年4月12日（文久元年）北軍の Sumter 要塞を攻撃することから始まるが、これはまだ17年も先のことである。

「偽報道」なのであるから、初めから「The Balloon Hoax」と題をつけて新聞に掲載する訳がない。ポオの死後、Griswold が4巻本の「ポオ全

1986. 3 「Hans Pfaall」, 「The Moon Hoax」と「酒精発酵の謎とけたり」(中崎) 25 (685) 集」を作ったとき⁽⁴⁸⁾, この題を付けた。そして紐育「Sun」紙の掲載予告の一部と「ノート」を「偽報道」の前に加えて第1巻に載せた。

このときの順番は「Hans Pfaall」「The Gold Bug」について3番目である。

しかし、この掲載予告も実際のもの半分ほどであり、本来なら末尾に入れるべき「ノート」を始めに置いているから、なんとも奇妙な体裁になっている。いきなり予備知識も持たずに読んでは、一体どこが面白く、どこが「偽報道」として企んであるのか理解に苦しむことであろう。むしろ新聞のままにして、掲載予告の全文を入れる方がまだしも素直でよい。こういう訳で、次に「Mabbott」版⁽⁴⁷⁾にある掲載予告全文の訳を紹介する。

「続報/至急便」

チャールストン発ノーホーク経由至急便：3日間大西洋横断!!—モンク・メーソン氏発明プロペラ気球サリバン島に着陸。社は昨晚おそく輪転機を止めた。南カロライナ州チャールストン発至急便により、人類はじまって以来の大冒険の詳細を入手し、これを逐一報道せんがためである。

大西洋がなんと3日間。信じられない早さで横断された! 塔乗員8人—ブリングハースト卿, モンク・メーソン氏同乗。この予期されざる新事実を報道するに時間のないのを憾みとする。朝10時までには飛行の詳細を報ずる号外の発行が可能と信ず。

追信：号外は朝10時、社の販売部で売り出せること確実。号外にはできる限りの詳細を報道する予定。なおプロペラ気球の絵はすでに有名画家に依頼されており、この報道と共に提供されるはず。

ポオの言葉⁽⁴⁹⁾を信用すると、夜明けと共に大勢の人が紐育「Sun」社の前に群がり、10時の号外が12時になってしまった。号外は売り切れて手に入りやすく、一枚12セントもした。中には50セントで買った人もあるという。本当のところは、例の「The Moon Hoax」の「poor imitation」だと言うのが大方の反応で、教育のある人がむしろ引掛かったらしい。

紐育「Sun」紙の訂正文が4月15日（月曜日）に出たころには、すでにチャールストンからの便りがあり、そんな気球は到着してないことが判明していた。

おわりに

この「The Balloon Hoax」のころ、ポオの書いた「詐欺-その精密科学としての考察」⁽⁵⁰⁾ (Diddling, considered as one of the exact science) (1843年) という小編がある。「まことしやかな嘘物語」への志向は、その生涯にわたって消えることはなかった。またそれで成功したのである。「The Narrative of Arthur Gordon Pym of Nantucket」(1838年) などは、英国で本物の航海記だと思って出版されたと言うし、「モルグ街の殺人」(1841年) を実際の事件だと信じていたフランスの批評家もあったという。

科学史的に見ると、この19世紀中頃は「驚異の時代」⁽⁵¹⁾ だったのである。人びとは目まぐるしく報道される科学的発見から科学に基礎をおいた時代の進歩に揺るぎない確信を抱いていた。「種の起源」(1859年) の初版1250部はその日の内に売り切れた。ダーウィン (Charles Darwin) と同時に進化論を発表したウォレス (A. R. Wallace) は「The Wonderful Century」(1899年) という本を書いて、当時の科学的発見の数かずを列挙し、時代を讃美している。

人びとの楽観的気分は、このころの未来予想図⁽⁵²⁾ たとえば「The New Life with Electricity」(1850年頃) などを見ると具体的に理解されるだろう。ポオやロックの擬科学「Hoax」が持て囃されたのは、こういう時代を背景にしている。

しかし、これも束の間であった。H. G. ウェルズ (H. G. Wells) の時代になると、擬科学物語も次第に暗い翳を帯びてくる⁽⁵³⁾。世紀末なのである。

ポオの最後の擬科学物語は彼が「A Prose Poem」と副題をつけた「Eureka」(1848年) ではなかろうか⁽⁵⁴⁾。彼はこの擬「宇宙論」(cosmol-

1986. 3 「Hans Pfaall」, 「The Moon Hoax」と「酒精発酵の謎とけたり」(中崎) 27 (687)ogy) を「very profound respect」と共にアレキサンダー・フンボルト (Alexander von Humbolt, 1769-1859年) に捧げた。

フンボルト (ヴイルヘルムの弟) はこの当時, 最高の万能科学者として, また国際人として名声の高かった人物である。ポオはこのフンボルトの壮大な cosmology 「Kosmos」(5巻本, 1845年より刊行) の英訳本を読んでいたのだろう。この英訳本は夏目漱石の蔵書にもあった。もちろん森 鷗外はドイツ語版を持っていた。教養人必読の書の一つだったのである。

「Eureka」はポオの死の前年 1848年9月に出版された。そして次の年かっの恋人 Sarah Royster, 今の末亡人 Barrett Shelton と結婚するために, 叔母クレム夫人をリッチモンドに連れてこようとして紐育に向った。ところが, 10月3日意識を失って発見されたところはボルチモアの酒場であった。最後は悲惨だったらしく, 「with great mental agony」で死亡したのは4日後の10月7日である。

妻ヴァージニアを失い, 孤独に耐え窮乏と戦いながら, 衰弱した身体で, よくこの「Eureka」を書いたものだと, むしろその執念に慄然とさせられる。「Eureka」の前文でポオは言っている。「私がここで提示したことは真実である。だから死滅することはない。仕方なく今は踏みつぶされ, 死滅しても, 「永遠の生命」を得て甦るであろう (rise again to the Life Everlasting)」。彼は真実そう信じていたのだろうか。

それとも, この壮麗な擬科学 cosmology 「Eureka」は彼が仕掛けた最後の「Hoax」なのであろうか。

ヴァレリー (Paul Valéry) も「Eureka」の文学性は認めているものの, その科学性まで信じていた訳ではあるまい⁽⁵⁸⁾。

文 献

- (1) R. Taft, *Photography and the American Scene*, Dover Pub. Inc., New York, 1964, p9.
- (2) R. Meredith, *Mr. Lincoln's Camera Man; Mathew B. Brady*, Dover Pub. Inc., New York, 1974.
- (3) ポオの伝記は Harrison によった。J. A. Harrison, *The Complete Works*

- of *Edger Allan Poe* (以下に「Harrison」と略す), Vol. 1, AMS Press Inc., New York, 1965.
- (4) ポオの年表: 佐伯彰一, 福永武彦, 吉田健一編「ポオ全集」(以下に「ポオ全集」と略す), 第3巻, 東京創元社, 1974年6月, p847.
- (5) ポオは「Pfaall」「Phaall」「Phaal」といろいろに書いている。「Harrison」Vol. 5, p137.
- (6) 「Harrison」Vol. 15, p126.
- (7) 「Harrison」Vol. 2, p42.
- (8) 「ポオ全集」第1巻, p34.
- (9) T. O. Mabbott Ed., *Collected Works of Edger Allan Poe* (以下に「Mabbott」と略す), Vol. 3, Beknap Press of Harvard Univ. Press, Cambridge, Massachusetts, 1978, p1396.
- (10) 中島文雄, 忍足欣四郎編「岩波 新英和辞典」岩波書店, 1981年2月, p84.
- (11) 原 光雄「化学を築いた人々」中央公論社, 昭和48年11月, p58.
- (12) フランス語原本のこの表の複製は次にある。J. R. Partington, *A Short History of Chemistry* (以下に「Partington」と略す), 3rd Ed., Macmillan & Co. Ltd., London, 1937, p134; 原 光雄「大化学者(上)ラヴォアジエ」弘文堂, 昭和16年, p87.
- (13) W. E. Flood, *The Origins of Chemical Names*, Oldbourne, London, 1963, p15.
- (14) D. McKie Ed., *Elements of Chemistry*, Dover Pub. Inc., New York, 1965.
- (15) 「Partington」p130.
- (16) 文献14, p175.
- (17) D. Malone Ed., *Dictionary of American Biography*, Vol. 6, Charles Scribner's Sons, New York, 1961, p338.
- (18) *Dictionary of National Biography*, Vol. 9, Oxford Univ. Press, 1950, p714.
- (19) 文献18, p719.
- (20) H. C. King, *The History of the Telescope*, Dover Pub. Inc., 1955, p202.
- (21) A. Berry, *A Short History of Astronomy*, Dover Pub. Inc., 1961, p397.
- (22) R. Burnham, Jr., *Burnham's Celestial Handbook*, Vol. 1, Dover Pub. Inc., 1978, p467.
- (23) *The National Union Catalog Pre-1956 Imprints*, Vol. 337, p566 には 10 数種の刊本がパンフレットを含めて挙げてある。例えば *The Moon Hoax*;

or A discovery that the moon has a vast population of human beings,
W. Gowans, New York, 1859.

- (24) M. Gardner, *Fads and Fallacies; in the name of science*, Dover Pub. Inc., New York, 1957, p66. Martin Gardner は「*Scientific American*」誌の数学パズルの担当者として知られている。
- (25) C. D. MacDougall, *Hoaxes*, Dover Pub. Inc., New York, 1958, p229.
- (26) 「Parsontown の怪獣」 Parsontown は Rosse 卿の屋敷のあったところである。この記事は「*Literati*」ロック評(1846年)にある。ただ「The Moon Hoax」の1835年には、この望遠鏡は無かった。铸造は1842年だからである。文献20, p214。
- (27) 文献24, p67。
- (28) *Dictionary of National Biography*, Vol. 15, Oxford Univ. Press, 1950, p218.
- (29) 田中 実「科学史大系第11巻, 近代化学史」中教出版, 1954年5月, p382。
「皮肉に満ちた批判を匿名で掲載した」とのみで、顕微鏡観察の「Hoax」と戯文には触れていない。
- (30) 文献11, p186。
- (31) B. Jaffe, *Crucibles: The Story of Chemistry*, Dover Pub. Inc., New York, 1976, p129.
- (32) 田中 実「化学者リービヒ」(岩波新書) 岩波書店, 昭和26年9月, p91.
- (33) G. W. Wheland, *Advanced Organic Chemistry*, John Wiley & Sons, Inc., New York, 1949, p2.
- (34) L. Hartman, *J. Chem. Ed.*, **34**, 141 (1957); F. Kurzer, P. M. Sanderson, *ibid.*, **33**, 452 (1956); D. McKie, *Nature*, **153**, 608 (1944); W. H. Warren, *J. Chem. Ed.*, **5**, 1539 (1928).
- (35) 文献32, p93。
- (36) O. T. Benfey, *Classics in the Theory of Chemical Combination*, Dover Pub. Inc., New York, 1963, p15.
- (37) 日本化学会編「化学の原典10, 有機化学構造論」東京大学出版会, 1976年6月, p265。
- (38) Alexander Findlay, *A Hundred Years of Chemistry*, Gerald Duckworth & Co. Ltd., London, 1965, p28.
- (39) O. T. Benfey, *From Vital Force to Structure Formula*, Houghton Mifflin Co., Boston, 1964, p42.
- (40) この英訳は次にある。H. B. Friedman, *J. Chem. Ed.*, **7**, 633 (1937); これからの転載は文献33, p676。
- (41) 山岡 望「化学史談 第7巻, リービヒ-ヴェーラー往復書簡」内田老鶴圃,

昭和50年7月, p162。

- (42) 山口清三郎「醱酵」(岩波全書) 岩波書店, 1953年1月, p3。
- (43) *Justus Liebigs Ann. Chem.*, **29**, 100 (1839)。
- (44) 文献24, p116。
- (45) 川喜田愛郎「バストゥール」(岩波新書) 岩波書店, 1967年7月, pp49, 65。
- (46) 「ボオ全集」第2巻, p305 (「軽気球夢譚」は「偽報道」ぐらいにすべきだろう): 「Harrison」Vol. 5, p224; 「Mabbott」Vol. 3, p1063。
- (47) 「Mabbott」Vol. 3, p1068。
- (48) 「Mabbott」Vol. 3, p1399: Rufus W. Griswold, *The Works of the Late Edgar Allan Poe*, J. S. Redfield, New York, 1850-1856。
- (49) 「Mabbott」Vol. 3, p1066。
- (50) 「ボオ全集」第3巻, p587; 「Mabbott」Vol. 3, p868; 「Harrison」Vol. 5, p210。
- (51) René Dubos, *Louis Pasteur-Free Lance of Science*, Charles Scribner's Sons, New York, 1976, p3: ルネ・デュボス, 竹田美文訳「ルイ・バストゥール」(1) (講談社文庫) 講談社, 昭和54年3月, p49。
- (52) Life Science Library, *The Scientist*, Time Inc., New York, 1971, p157。
- (53) Norman & Jeanne MacKenzie, *H. G. Wells*, Simon & Schuster, New York, 1973。
- (54) 「ボオ全集」第3巻, p428; 「Harrison」Vol. 16, p179。
- (55) この偽名はリービヒの作で、ヴェーラーはもっとフランス人らしく Ch. Arlatan (フランス語 Charlatan ほら吹き) にでもしてほしかったと言っている。文献38, p29。
- (56) ソラニンジャガ芋の芽の中に発見される有毒のアルカロイドである。
- (57) 繊維素(セルロース)から塩素置換で出来るものと揶揄している。
- (58) ヴァレリー, 吉田健一訳「ユリイカをめぐる」, 世界文学大系第33巻「ボオ・ボオドレー」筑摩書房, 1959年7月, p428。
- (59) このころ、ダーウィンを乗せたビーグル号はラブラタ河口にいる。ダーウィンは世界一周の帰路1836年5月にここを訪ねた。